

カミュの『ペスト』と 映画「コンテイジョン」

カミュの『ペスト』（宮崎嶺雄 訳、新潮文庫）を読んだ。今年だから読み通せた。

アルジェリアの商業都市オランで伝染病ペストが流行し、194*年4月から翌年2月まで街が封鎖されてしまう。最低限の必要物質だけが届けられる以外は、感染予防のために郵便のやりとりもできなくなる。

主人公の医師リウーは治療に奮闘する。いち早くペストの可能性に気づいた先輩老医師カステルと相談し、やっと県庁で保健委員会が開かれるが、行政トップは事を荒立たせるのをためらう。利害が食い違い、優先事項が異なっている。経済活動が滞り、治安も乱れる。

人々は疑心暗鬼にかられ、宗教に救いを求め、次には迷信に走る。感染予防の目的でハッカドロップが売り切れる。

取材の仕事でたまたまパリから来ていた新聞記者ランベールは、脱出に挑戦するが失敗が続く。「ペストに感染していない」証明書を希望して、主人公のところにも来る。無理と分かり落胆するが、次第に考えが変化していき、同じ困難を共有する者同志という連帯感が生まれて協力者となる。

神父パヌルー、市役所の臨時職員グラン、犯罪者コタールなどが登場し、それぞれ自分の振る舞いを模索する。1940年代の設定だが、2020年の今に通じるものがある。

最も印象に残ったのは、ペストとの戦いで盟友となった旅行者タルーと主人公リウーが、夜の海で泳ぐ場面である。月明かりと星影のもと、静か



で穏やかな場面だ。

主人公リウーは既婚者だが、彼を支えるのは母親である。母親は感染もせず、体調も精神的にも安定し続けている。家事をこなし、話し相手となり、主人公の考えを全面的に受け入れ協力する。主人公の友人タルーに対しても聖母か観音菩薩のようである。

主人公の妻は離れた町で病気療養中という設定で、物語の終盤、亡くなった知らせが届いたと、言葉少なに書かれている。

映画「コンテイジョン」（Contagion：2011年アメリカ）も観た。「オーシャンズ11」のソダバーグ監督の映画である。こちらは1時間45分で見る事ができた。

新型コロナウイルス感染症で、今年1月に武漢で、2月にクルーズ船で、3月にニューヨークで起こった状況と似ている。

Day2（2日目）から始まるサスペンスで、緊迫感のある端正な場面の連続でテンポよく進み、最後の場面で一気に謎が解ける。

立場の異なる3人の女性ドクターが登場する。CDCの感染症調査官、感染の出处を突き止めるため香港へ派遣されたWHO職員、ワクチンを開発するドクター。結末は3人全員必ずしもハッピーエンドとはいかないが、3人とも全力で仕事に取り組み、それ以上に自分の信念を守り通したという点で共通している。

異色の登場人物は、迷惑なブロガーである。彼は次々と過激なメッセージをブログで拡散する。

影響力が大きいだけに、軽視できない存在となる。誤った情報は、ウイルス感染よりも早く広がり被害を及ぼす。人々を混乱させ、暴動の引き金になる。

「治療効果がある」と彼が言ったレンギョウ（連翹：Forsythia）を求めて薬店に人々が列をなす。店員の「今日はここで品切れです」の言葉で、それまで何とか順番を待っていた普通の人々が暴徒と化す。

「コンテイジョン」では、やっと出来上がったワクチンの接種の順番を誕生日による抽選で決めていた。何か月も待たされる人が出てくる。誘拐・取引・脅しが起こる。登場人物は、それぞれ自分の大切な人を守ろうと考え行動するが、それが他者との軋轢を生む。

現実に戻って、新型コロナウイルス感染症の治療薬もワクチンもまだ無いが、2020年8月6日、イギリスの大手製薬会社が開発中の新型コロナウイルス感染症のワクチン1億回分以上の供給を受ける方向で厚生労働省が最終調整に入ったというニュースが出た。すでにアメリカの製薬大手から1億2千万回のワクチン供給を受けることで合意しているのに続く朗報である。


日本医師会
医師年金

スマホ・パソコンで簡単手続き



加入資格は日本医師会会員で64歳6カ月未満の方です
(申込みは、満64歳3カ月までをお願いします)

医師年金HP画面

アニメーションで仕組みを確認




シミュレーションで保険料を試算

一括払専用加入申込書プリントアウトで申込み
(保険料のお支払いは後日ご案内します)

※重要事項説明書をよくお読み下さい(申込書の3、4ページに記載)



お問い合わせ先

日医 年金・税制課 ☎ 03-3942-6487(直) (平日 9時半～17時)